

法然上人の円戒觀

小 川 隆 宏

戒は實に一大仏教の根本基礎をなすものであり、原始經典の上に於ても諸處に散見するここが出来たる如くに、戒を修することによつて定が現われ、定を修することによつて慧が現われるのであつて、戒を修道の第一條件としているのを以て見ても、戒が如何に重要なものであるかが解ると共に、仏教の實踐は正に戒であると言つても、過言ではないのである。否、仏教は戒を以つて根幹としているのであり、仏教は戒を濟禪したものである。この様に考へる時、一大仏教中に於いて戒學の地位は極めて、重大なるものが存すると云わねばならない。こゝに一天の戒師として現われている円頓戒血脈の相承者法然上人が、戒と念仏の關係について、どの様な態度を取り示されていたかと云ふ事である。そこには多くの問題が介入しているのであるが、これを順次問題を展開させて、法然上人の円戒に關する思想を考究して行こうと思ふのである。

選拔集に於いて上人は先ず卷頭に、道輝の安樂集にふる聖淨二門の捨聖歸淨にとづいて、末世の世に於ける時機相應の教としての淨土門を取り上げられ、次いで淨土の觀經疏によつて

、往生淨土の行業に廃立を行い、往生の行相として、一心に弥陀に皈命して行われる説誦、觀
察、礼拜、称名、讚歎供養の五種の正行をそれ以外の自餘の諸行より區別して、更にこの正行
中に、行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てざる一心専念の称名をもつて正定の業とされ
、他の前三後一の四業は助業として取り扱われているのである。又五種正行以外の自餘の諸行
行業は、雜行と名づけられるが、それには先の五種正行に對比した五種雜行と、その外に更に
布施、持戒等の無量の行とがあること示されているのである。更にまた上人は念仏が選択本願の
念仏である所以について、念仏と餘行に勝劣難易の二義を立てられ、弥陀一仏の所有の善徳は
、その名号に攝在するが故に、念仏は餘行の占める一隅の功德を超えて勝れてあり、又單なる
口称の念仏であるが故に、餘行に比して修し易いと説き、持戒持律が弥陀の本願と立てられな
い理由は、持戒の人に比して極めて、多数を占める破戒の人が往生を失ひ、仏の救ひの対象か
ら除外されるからと、上人は述べておられるのである。

正定業、即ち称名を以て往生の業と爲し、念仏以外に往生の術が無いとされ、明らかに持戒
が占める位置は、上人は雜行と見なされているのである。

法然上人は、師黒谷徹空上人より呵毀戒の血脈を相承されたのであり、勅伝卷四卷に、「天
台大師の本意一実阿戒の至極なりけりとぞ申されける」。とある如く、上人自ら一天の戒師た
る事を自覚し自証され、戒師として広く道俗貴賤を問はず、持戒に与へておられるのである。
然しながら、上人の全生涯並に全語録の何処を廢つて見ても、あらゆる文献に自己の破戒無漸
の徒であることを常に告げられ、念仏の外にことさらに戒の必要を認めておられないのである。

的門上人が、善通授戒辭に於いて、「元祖大師御在世の時、有人授戒と念仏とを並べ求む人ありしが、先づ戒を授け後に念仏を授け玉ひたる趣、勅伝に見へたり、然れば、此の祖殿に適從するを、淨土宗の本意とす。故に今初受の人々に能く心得篤實に勤修せられるべし」と述べられてゐる如く、上人は明らかに念仏と戒とを何らかの形に於いて、密接な關係を持っていた所に伺はれるのである。

上人の御生涯に於いて、戒と念仏とは車の両輪の如く、両翅の如くに御弘通されていたが、御歸來の時には、「唯往生極樂の爲には兩無所缺也」と申して疑いなく、往生するぞと思ひ取りて唯一向に念仏すべしと、戒と念仏との中には正しく念仏が生死解脫の利劍なることを起請を立玉はめて御遺訓となつておられるのである。

戒行は飽くまで道德であつて、眞實の宗教信仰となり得ないのであり、持戒の仕難いを自覺し、平等の慈悲に徹して眞の信仰生活に入られたと云うべきであらう。自力に依る戒法の修行、その永遠不得の戒法を否定して、絶望の底から信仰の力が生れて来るのであり、「若以持戒持律而為本願則戒無戒人定絕往生望然持戒者少破戒者甚多」(選撰集)と云ふ如く、破戒無戒なる事を深く自覺されているのである。

上人は通依菩薩心によつて、指導大師の意を車直に汲み取つておられる事付言かまででない。則ち、「法華和尚觀念法門」には、唯だ須持戒念仏すとの玉ふとある如くに、戒行は念仏との合行と見られぬ事はないではないか、上人は戒と念仏に關して、念仏に併合した戒ではなくて、念仏生活の中に自づと取り入れられた戒であると思ふべきである。則ち往生要集略料簡に、「應持十重戒又具足三心常持殊勝名号」とあり、又叢山の狀に、「それ十重をたもちて

十念をとなへよ、四十八願をまもりて四十八願をたのむは心にふかくこひぬがふ所なり。とあり、正に念仏と戒との關係を明示せる文獻であつて、至心に念仏する中に自づと持戒清淨の生活相が、発現するものであると觀照されたのである。所謂念仏は万徳所歸であるから、持戒して念仏するのでなく、念仏する中に自づと持戒の徳が具つて来るのである。

「十重を持ちて十念を鉢へ、四十八願をまもりて四十八願をたのむは心にふかくこひぬがふ所なり」へ登山の狀へ等と、しばしば、上人が戒法の尊むべきことを説き、且つ、諸位にある如く、南岳天台一実円頓の戒法を授けられているのであるが、念仏に不足の意あつての事でもなければ、それを亦せぬばならないものとして、強要されたものでもない。即ち上人の熊谷入道へつかぬす御返事に、「されば持戒の行は、仏の本願にあらぬ行なれば、たへたらんにしたがつて、たもたて給ふべく候」とある如く、戒法を決して強要されておられないのである。従つて、上人が持戒に対する態度は否定的ではなく、寧ろこれを奨励する度合に於いて、肯定されてゐる。即ちそれは個人的な是を認め、あるものはこれに耐え、あるものはこれに耐えない場合、耐え得ないものには強いてこれを追求しない。それぐの時機相應に随つた持戒を認められてゐる。然して念仏と戒行との關係に於て、戒行を守ると云ふ事に限り、少しでも念仏行のそこなわれる様な恐れがあれば、「小々戒行やおくれども」念仏行をそこなわない様にすると云つた態度なのであり、上人としては、戒律受持の生活は、諸仏の通訓として希うべきもの、しかしそれをし得るならば、それはいかに禁めても、誰人にも之に隨ふものなく、詮なき現実より約束に過ぎないのである。唯々念仏の相續が得られるうちに、相付かるべきことが希われるのみであり、現實に展開されてゐる末流の時機の洞察は、諦觀を予えるが故に、「たへたらん

にしたがいてたもつべきであることされ、「ことと根は念仏のいとまあらばの華」とされるがその半面、その同じ随分の持戒をすゝめる態度の中に聖者の一面が法然上人の底を貫いて、流れていると知られるのである。

所謂、結願一行三昧の精神に立脚した戒律観が、上人の根本思想である。従つて安然和尚が主眼とした四恩報恩の道徳説の如く、自力的観念に立脚して説くよりと、上人の如く他力的観念に立脚して觀察する時、より積極的な力強い報恩生活が現れ、念々殊名帝懺悔の真摯な念仏生活の中に自づと四恩報恩の生活相が具現して来るのであり、これが則ち上人の念戒に対する根本思想であるとみなすべきが、当然であらうと思われるのである。

以上